

堆肥の生産・販売に関するQ&A

Q

副資材に「もどし堆肥」を使用しています。今回塩類濃度の低い堆肥を生産するためオガ屑やモミ殻の使用を計画したところ、「もどし堆肥」を使用する堆肥化よりも腐熟に長い期間が必要と言われました。なぜ副資材の種類により家畜ふんの発酵期間が異なるのですか？

A

確かに様々な本に「もどし堆肥」使用の場合は2カ月（60日）、オガ屑やモミ殻使用の場合は6カ月（180日）の発酵期間が必要と書かれています。（堆積高2mの堆肥舎、切り返し1回/月、通気無しの場合）

これはオガ屑やモミ殻の有機物が非常に難分解性で、分解には長い期間が必要とされることが理由のようですが、堆肥化の目的は易分解性有機物の分解であり、家畜ふんに含まれる難分解性有機物は堆肥に残さなければならないのですから、当然、オガ屑やモミ殻の難分解性有機物も分解させる必要がないことになります。

また、オガ屑やモミ殻の有機物は非常に難分解性であるために180日程度では分解が終了しませんし、仮に完全に分解を終了してしまったら有機物が全く含まれていない堆肥となり有機農業を行うことができなくなってしまう。

堆肥化とは好気性微生物による易分解性有機物の酸化分解作用ですから、家畜ふんや副資材に含まれる易分解性有機物の分解が終われば堆肥化は終了するのです。

つまり、オガ屑やモミ殻は分解しにくいから長い発酵期間が必要との考え方は誤りであり、必要発酵期間は副資材の種類によって決まるのではなく、混合物の容積重、切り返し頻度、体積高、通気の有無などの各種堆肥化条件によって決定されるのが正しい考え方なのです。

この考え方では「もどし堆肥」添加の場合でもオガ屑添加の場合でも冒頭に示した堆肥化条件では約134日の発酵期間が必要と計算されますので、様々な本に書かれている「もどし堆肥」添加の必要発酵期間60日が短期間すぎるということになります。もっとも、正しい計算によらなくても堆積期間中の切り返しが1回だけで堆肥化が終了するとの理論に無理があることは誰でも判ることですが。

（財）畜産環境整備機構 審議役 本多勝男

◆ 堆肥センターだよりのQ&Aは、（財）畜産環境整備機構本多審議役が回答しています。

読者の方々の堆肥生産等についてご質問がありましたら、事務局までご一報下さい。

FAX 03-3459-6315

E-mail leio@leio.or.jp

全国堆肥センター協議会 事務局

編集後記

- ◆これまで、表紙に巻頭言を掲載していましたが、今回からたい肥生産や耕畜連携をテーマとした写真に変更し、堆肥センター協議会や耕畜連携に関するコラムを追加しました。
- ◆本年3月末には、家畜排せつ物利用の促進を図るための基本方針が公表されましたので、その概要を掲載しました。
- ◆堆肥コーディネーター研修が本年も実施されま

す。作物生産の向上と持続的土づくりを推進するため、良質な家畜ふん尿たい肥の適正かつ積極的な利用を指導する意欲と知識・技術を有する人材を養成するもので、生産した堆肥の利用拡大に大いに資するものと期待します。詳細は農業技術協会のホームページ<http://www.nougi.or.jp/>をご覧になるか又は堆肥センター協議会事務局にお問い合わせ下さい。

発行/全国堆肥センター協議会事務局（財団法人 畜産環境整備機構 技術・普及部内）

〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-19-13 スピリットビル4F TEL 03 (3459) 6139 FAX 03 (3459) 6315

平成19年7月31日発行